

かえり道 さへい道

前任からの法座お誘い状 第8号

●ひとつの命

花咲けば命一つといふことを

俳人 大峯あきら

※「命一つ」というのは、自分の命は一つきり、人生は一度きりという意味じゃなく、どれだけ沢山の花があっても、すべて、如来様という無量寿なるものに生かされている。命は私の独占物じゃない…。さくらの花の中でふつと感じて生まれた俳句。」と作者は語ります。

(北九州市若松区 極楽寺 句碑除幕式挨拶より)

※作者は大峯顕、俳号が大峯あきら。奈良県吉野の専立寺の住職、大阪大学の宗教哲学の教授。昭和61年と平成3年の二度、専徳寺仏柱主催の文化講演会にお越しくださいました。

●つながる命

われ亡くて山辺のさくら咲きにけり

俳人 森 澄雄

※「俳人の森澄雄と大峯あきらは連れだつて松尾芭蕉のふる里、伊賀上野へ行った。二人はそこで見事な桜を見た。芭蕉はここで、さまざまな事思ひだす桜かなと詠んだ。

澄雄は桜を見上げながら、自分が死んでも、桜は春になればまた花開く。それが見れないのが癪だな。と言った。

大峯は哲学者であり仏教学者であり、浄土真宗の僧侶である。「なに…、あの世とこの世はつながっていますよ。」と桜を見上げながら言った。澄雄は、いかにも浄土真宗の坊さんらしいなと思ったと随筆に書いている。

その後澄雄は夫人と毎年のように吉野の桜を見に行つた。そこでも桜は美しく花開いていた。あの世とこの世はつながっている。澄雄は大峯の言葉を思い出して、掲句を詠んだ。自分が死んでも、この世からいなくなつても、この吉野の山の桜は咲く…。

自分の死などという『ちつぽけ』なことを越えた、大きな自然の流れを見たのである。」

(林誠司「俳句オデッセイ」より)

●よみがえる命

※帰命無量寿如来、親鸞さまは浄土真宗の世界観(命の流れ)を自然法爾と呼び、海という言葉で語られます。「本願海」「群生海」「生死海」、…。

※「海」の漢字は再生の意味を持つ「母」の字を包みます。フランス語の「海」と「母」は同音のラメール、大和言葉の「うみ」は「産み」の意味です。

※帰命と無量寿と海と母と…表現はちがつても宗祖の受けとめに区別はありません。すべての人の生命に関わる言葉だと…。

※伝統とは亡くなった人が生きていることなんです…。忘れられない大峯先生の言葉です。伝統とは亡き人をよみがえらす力のことでしょう。

※今年1月30日、大峯先生が急性心臓疾患で亡くなった。いえ、広大な浄土へ還られました。

「なもあみだぶつ また会いましょう。」…と。

※さまざまな事思ひだす春彼岸です。どうぞお参りください。

(平成30年 春讃仏会法要 前任職)